

子どもものの表現に、物語はなぜ必要か

—2歳の描画遊びの応答から—

※2011年4月5

日立家庭教育研究所 研究員 片岡杏子（かたおかきょうこ）

概要

本論は、2009年から2010年に実施した幼児親子の描画遊びの記録に基づき、2歳児の描画活動と親子の応答について検討した考察である。

子どもはおよそ1歳後半からスクリブル（なぐり描き）と言葉の意味を関連づけるようになるが、2歳代ではより複雑にイメージを構成して表現する。この時期の子どもが描画を展開する中で創り上げるストーリーは、長期的な育ちにおいても重要な意味を担っていると考えられる。本論では、実践研究を通して観察した3組の親子のエピソードから、次の考察を導き出した。

子どもは絵具を用いて描画遊びを行う中で、活発に身体を働かせながら活動している。そしてその出来事を中心に身を置きながら、一方で、身近な他者と相互に応答することによって描画を展開してい

く。子どもの描画活動において身近な他者と応答することはとくに重要であり、他者に向けて自らの意志を伝えながら描くことによって、子どもは「描く主体である（わたし）」を表現していると考えられる。また、子どもは具体的な事物を描く中で、空想の物語の中に入り込んで遊んだり、自分を含めた物語を描き表したりする。その際、自分の知っている生き物や家族、自分自身を対象化して描くことによって、「他者と応答する自己」の視覚的なイメージを表現している。身近な他者とのあたたかい応答によって満たされるこのイメージは、子どもの周辺にある人的・物理的環境の認識の仕方に影響を与え、いずれ成長の過程で直面する危機において子ども自身を支えるイメージとして、長く子どもの中に印象づけられていくことが期待される。



目次

- 1 問題意識——2歳の描画遊びから「わたし」の始まりを読み取る
 - (1) はじめに
 - (2) 描画遊びを通じた「子どもの語り」から
- 2 出来事を中心としての身体
 - (1) 絵具を感じる——O児と姉と父のエピソード
 - (2) 身体から始まる物語
- 3 描画における「わたし」の表明
 - (1) 一人の「わたし」として描くということ——A子と母と父のエピソード
 - (2) 描きながら伝えたいこと
- 4 描かれた物語が子どもにもたらすもの
 - (1) 応答における語りのプロセス——H子と母と父のエピソード
 - (2) 描くことで語られるもの
- 5 物語を通して子どもがいただく「わたし」——満たされた自己イメージへ

1 問題意識 — 2歳の描画遊びから〈わたし〉の始まりを読み取る

(1) はじめに

大量の情報が生活を取り巻く社会において、人間は統一した自己を抱く(〈わたし〉)として生きることが難しい。現代社会に適応して生活するために求められるのは、感じ考えるよりもむしろ合理的に情報を取り込んでいく技能であり、その手続きにおいては、一人の人間としての思いを抱いて特定の他者と関わり続けることがないからである。また、日常的に用いられるメールやツイッターなどの情報ツールが、「感じ考える(〈わたし〉)」を柔軟に表明させる一方で、不特定多数の他者との外形的なつながりを増やし、逆に人間の内面を見つめづらくさせていることもその要因といえるだろう。

思いを抱き、感じ考えながら活動する機会
の欠如は、人が一人の(〈わたし〉)として生きるうえでの統一感を損なう。本来、感じ考える主体である人間は、さまざまな風景や他者と出会いながら、相互的な関わり合いの中で

成熟してゆく存在である。そしてだからこそ、人が発達各段階において、周囲との関わり合いを通して心の危機をも生じさせることが指摘されてきた。

人が、とくに青年期において、内的な自身と社会のあいだで葛藤することによって心理的な危機を迎えることを指摘したのはエリクソン (Erik Homburger Erikson, 1902-1994) である。エリクソンによれば、人は他者の判断基準にしたがって自分自身を判断したり評価したりするが、その際、他者による基準を取り込むだけではなく、その評価の内にある「自分とその他者との関係性」を考慮して捉えている¹⁾。それは無意識の判断であり、人が青年期に至るまでの過程で、自分と身近な他者との内面をゆるやかに分化させつつ獲得する精神活動のかたちである。

人の内面における世界は、自分と他者との関係性から始まっている。子どもの世界は、あらゆる人的・物理的な環境との関係に彩られており、子どもは日々出会う人や事象との

関わり合いを自らの身体を通して経験することによって、それが自分にとってどのような対象や出来事であったのかを記憶する。そして、相互的な関係性の中心で感じ考える(〈わたし〉)を内面に抱いて、やがて「他者と異なるわたし」を明確に立ち現すようになるのである。

それでは、もしも仮に、感じ考える主体である一人の(〈わたし〉)が、周囲の人や物との相互的な関わり合いを十分に経験せず日常生活を生きたとしたら、その育ちのプロセスはどうなるのだろうか。おそらく子どもは、中心にある(〈わたし〉)を捕らえどころのないもののように感じ、一方的に見聞きした情報を受容し続けることによって、その内面に現実感のない世界を創りあげていくだろう。そしてその中心となる(〈わたし〉)を評価するための信頼し得る基準もなく、常に自己への不信を抱えながら、自分ではない何ものかに合わせた行動を折々に選択するようになるだろう。これは、生身の(〈わたし〉)を表さずにつながり

合う関係性が既に日常化した現代において、多かれ少なかれ誰もが抱える共通の心の問題ではないだろうか。

(2) 描画遊びを通した 「子どもの語り」から

筆者は、2008年5月から2010年3

月の期間、東京学芸大学大学院連合博士課程に在籍しながら、東京都小金井市のキャンパス内の施設で、幼児とその親を対象とする描画遊び活動の実践研究を実施した。そのうち、1歳代の子どもの描画遊びの展開について記した論文ではⁱⁱ、2008年5月から2009年2月までの記録に基づき、子どもが母の描いた線を模倣する過程において、母と心の動きを組み合わせる関係の中で、母と異なる自分の線を描きながら主体を表すことを説明した。1歳の子どもは、様々な感情を抱いて身の周りの出来事を捉え、その中でだだをこねたり要求する行動を通して自分の主体性を主張する。そしてこの自分を主張する活動は、子どもが周囲と自己との相互作用を必然的に経験する機会を生む。

幼い子どもの表現は、そのプロセスに身近な他者との応答を含んでおり、その活動の質は、2歳を越えると著しく変化する。子ども

たちは日常生活の中で記憶した人や物の名前などを言葉として再現し、やがて二語、三語と複数の意味をつなげて話すようになる。そして描画を通じてもまた、それまでの経験から記憶した事象を組み合わせて表現し始める。感情によって貫かれた「わたしの物語」が、言葉や描画を通して、より複雑な様相を帯びて組み立てられていくのである。

子どもが生み出す物語は、子どもの内面において構成される表象のまとまりのかたちであり、言うなれば、それは造形的な「語り」であるⁱⁱⁱ。物語に至るまでに、子どもは絵具やクレヨンなど素材の感触や色彩に対する身体感覚を働かせ、さらにそこで生じる心の動きを信頼する他者に受け止められることによつて、自分なりのかたちで表すことができ。この行程を、物理的な形式によつて構築する作業がいわゆる「絵」であるが、それでは、その中で語られる「物語」には、どのような意味があるのだろうか。

物語には、出来事を中心にいて現在進行形の応答を通して現れながら、過去の出来事を思い起こして語られるという重層性があるが、いずれの場合にも、それは「語る相手」を通して成立する。相手を通して語るこの連鎖は子どもにとって重要な何かをもたらしており、子どもの姿からそれを感じるからこそ、

「語られる相手」である親もまた、子どもと通じ合う言語で応答しようと努めるのである。

以下、本論では、先述の東京学芸大学で実施した実践研究に続く研究として、2009年5月から2010年3月にかけて計6回実施した実践活動の記録に基づき、この問題を考察していく。実践は、2歳から3歳の子どもたちが親と一緒に描画遊びを行う活動であり、全体の参加者は、前年度の実践（1歳から2歳にかけての描画遊び）から引き続き参加した2歳から3歳の子どもとその親8組である。活動日は2ヶ月に一度、日曜日の午前10時半から12時に設定した。活動場所は東京学芸大学構内にある造形室とし、室内にブルーシートを敷いた上に壁と床に合計10枚の大判用紙を貼り付け、親子が場所を自由に選んで活動できるように環境を設定した。使用した描画素材は粉絵具で、透明のプラスチックカップで水に溶いて用いた。参加者には、筆者から絵具遊びのヒントとして「まぜる」「たらず」「手型を取る」などのアイデアを毎回「メモ」として渡し働きかけを行ったが、遊びの方法や展開の仕方はそれぞれの親子の判断に委ねている。

2 出来事の中心としての身体

(1) 絵具を感じる」と

— O児と姉と父のエピソード

5月10日、2歳3ヶ月のO児は、幼稚園の年長児の姉とともに父親に連れられてやって来た。この日は、この年度で最初の活動日であり、O児は父に抱かれながらプラスチックのカップに入った青い絵具を受け取ると、床に敷いた模造紙の前にしゃがみ、絵具のついた筆をためらいなく紙に走らせ始めた。そして円状の図や線を描いては、父に向かって「ア

ンパンマン」や「デンシャ」などと言う。

O児はしばらくの間、姉と並んで線を描き続け、その間、何度も父の方を振り返って色の名前を口にした。その中で、周囲を指さして何か言ったりした。その中で、手を床についた際に絵具がついたので、O児は手のひらを広げて父に見せた。父は「ペタってやってごらん」と紙の上に乗出し手をついてみせてO児を誘った。O児が父と同じように紙に手をのせて叩き始め、紙の上に乗出し始めると、父はO児の足に手を伸ばしてズボンの裾をたく

し上げる。それから、傍らにいたO児の姉が手に直接絵具を塗って手型を押して見せたので、父はまたO児にも手に絵具を塗ってみるように促した。O児は自ら筆で手のひらに絵具を塗ると、紙の外側を歩いて余白部分の前行き、手のひらを押し付けた。子どもたちがこの活動を繰り返していると、さらに父が「今度は足をやったら」と言う。その言葉に姉が「アシッ」と声を上げて反応し、一方のO児は、さっそくあぐらをかいた父の膝に座って、足の裏に絵具を塗ってもらおうとい



図1



図2

う体制をとる。父はO児の足の裏に絵具を塗ってやり、それからO児を抱き上げて紙の上に連れて行くと、片足を紙に着地させて足跡をつけさせた。抱かれたまま父の顔を振り返って見上げるO児。それから父はO児を抱き上げては着地させる遊びを繰り返して行い(図1)、紙の上にO児を置いて、少し離れた。O児が立ち止まったまま父の方を見て「パパ」と呼ぶと、父は「歩いていいよ」と言う。そしてO児が父の方へ歩いて来ると、父はO児の足跡を「ほら」と指さした。O児もそれを見る。

その後、再びO児は自分の手のひらに絵具を塗り始めた。筆の感触に刺激を受けているのか、首をひねって父の顔を見上げ、くすぐったくしておかしい、というような顔をして笑う(図2)。そしてまた紙のあちこちに手のひらを押し付けては、紙に手の跡をつける遊びを繰り返した。

それから8ヶ月後の1月24日。2歳11ヶ月になったO児は、4回目の活動参加のために、再び姉と父とともにやって来た。O児と姉は既に絵具遊びに慣れ親しんだ様子で、やって来てすぐに筆を手にとって描き始めた。O児は円を描きながら、また「アンパンマンダ!」と言うなどする。そしてしばらく絵具を塗る作業を続けてから、筆の穂先を握って絵具を

つけ、その手のひらを父に見せてにこりと笑う。父がそれに応え、また紙に手型をつけるように促すと、O児は壁面の紙の前へ行き、叩くように手のひらを押し当て、「ウヒヒ」と声をあげて笑う。

その後、父はO児に向かって頬の辺りを指でくくるく回してみせて、顔に絵具を塗ってみるよう促した。傍らにいた姉が驚いたように笑い、「エー!」と声をあげる。

O児は父を見上げながら筆の先を頬に当て、くると回して絵具を塗ると、父の指さす壁面の紙の方へ向かって歩き、そこに頬を押し当てた。

O児と姉は、続けて手と腕、足の裏に絵具を塗り始めた。そして姉が床面の紙の上を姉が器用に四つん這いで歩いて手や足の跡をつけていくと、O児もつられるように四つん這いで紙の上を移動した。二人は笑い声をあ

げて紙の上を這い回りながら、体に絵具を塗っては、何度もその場を往復した。やがて姉が顔に絵具を塗って紙につけ始めると、O児も「Oモ!」と叫んでその後には続き、また顔に絵具を塗っては、横を向きながら紙に押し当てた(図3)。



図3

(2) 身体から始まる物語

手足や顔に絵具を塗って紙に写して遊んでいたO児は、紙についたその跡に関心を持ち常に確認していたわけではなく、むしろ絵具を身体に塗る感触と、その身体を見て姉と笑い合ったり高揚した気持ちを父に伝えたりすることの方を楽しんでいる様子であった。顔や体に絵具を塗るだけのその遊びが、子どもたちにとってそれほど楽しく感じられるのはなぜだろうか。

絵具遊びの活動で子どもたちの身体が受ける知覚的な刺激は、ベタベタする水彩絵具独特の感触や少し冷たい水の温度、鮮やかな色彩と混色による濁り、そして大判の画用紙に体ごと飛び込んでいくときの風景の変化などである。それは通常、子どもにおける強烈な現実との対面であり、だからこそその刺激に対し面白さを感じることもあれば、恐ろしい印象を抱いて不安を感じることもある。おそらく、強い刺激に対し怯えることなく立ち向かい、むしろ快さを感じて笑い合うことができるO児と姉の場合には、身体を汚して遊ぶ同様の機会が日常に少なからずあって抵抗がないのであろう。ただし仮にそうであったとして、子どもたちがはしゃぎながら遊びを展開する様子を見ると、彼らが単に身体的

な刺激を楽しんでいるだけではないことがわかる。この実践におけるO児と姉の遊びには、子どもたちと積極的に応答する父の姿勢が大きく影響しているからである。

先に述べたように、絵具を触ったり体に塗ったりする行為は身体への直接的な刺激であるから、その刺激を面白がる経験の中心は、あくまでも子どもたち自身の身体である。ただし、その出来事を楽しいと感じる子どもたちの心の動きは、明らかに父との応答によって助長されて高められている。O児が絵具の質感への関心を広げ遊びを展開するに至るまでには、度重なる父の後押しがあった。そし

3 描画における〈わたし〉の表明

(1) 一人の〈わたし〉として

描くということ

— A子と母と父のエピソード

5月10日の時点で、A子は2歳4ヶ月であった。他の子どもたちと同様、1歳のときから描画遊びの活動に参加していたが、絵具で遊ぶのは今日が初めてである。昨年度から活動場所が変わったためか、やって来てからしばらくの間、座っている母の背中にしがみ

てその父によって許容され見守られている安心感が、刺激に彩られたこの出来事を、楽しい冒険的な出来事としてO児に認識させていたのではないだろうか。

この身体を通じた遊びの過程で、O児と姉が「何を描いたか」という事実はさほど問題ではない。重要なことは、絵具という素材が手や足や頬に塗られることによって子どもの次の行動を引き起こしていることであり、また、遊んだ痕跡としてそのまま紙の上に残ることによって、子どもたち自身と父に、遊びの印象を共有させていたことである。

つくなど落ち着かない様子である。しかし母が赤いハート型の図を描いてその中を塗りつぶしてみせると、A子もそれに倣って、自分で筆を持ち色塗りを始めた。この日は母と父がA子と一緒にやって来ており、二人はA子が作業する両側にしゃがんで、指を使って紙の上で絵具を伸ばしたり広げた手のひらに絵具を塗らせるなどしてA子の遊びを誘導しつつ、様子を見守っている。

A子は座った姿勢で両手に筆を持ち、感触



図4



図5

を確認するようにしばらく筆を動かし続けていたが、その様子を傍らで見っていた母と父が、二人で指に直接絵具を付けて絵を描き始める。自分が持っていた筆をプラスチックカップの中にさし込んで手を離し、「Aちゃんモ」と言った。右手の人差し指を立てたA子は、一瞬、どうすれば母や父と同じことができるのかと迷った様子であったが、母が絵具の入ったカップを指さしてみせると、その中に指をさし入れた(図4)。そして紙の上へぺたりと絵具を付けると、顔を上げ笑顔で「ママ」と声を上げた(図5)。

A子は、その後も絵具の色塗りを続け、異なる色の絵具が前に置かれるとそれを新たに手に取ったり、紙の余白を求めて描く場所を移ったりした。A子は常に母と父の側で活動していたが、しかし父がカップの中から筆を取り出すと、すぐに取り上げてカップの中に戻し、また取り出すと、またそれを取り上げて「Aちゃんノ」と主張したり、大きな声を出して抵抗する。母はそんなA子の気持ちを代弁して「それ使っちゃ駄目なんだよ」と父に伝えるが、二人はそんなA子の様子を半ば面白がっているようである。

その日の活動が後半にさしかかった頃、A子が緑色の大きな塊を描いているのを見た母が、「イモムシみたいね」とA子に言った。それに対し、A子が「カエルサン」と答える。母が「かえるさんかあ」と応じながら、A子の描いた緑色の塊の上にカエルの目玉を描いて見せると、A子は母が描いた線をなぞるように、その辺りに筆を走らせた。そしてしばらくすると今度は場所を変えてまた緑色の塊を描き始め、再び「カエル」と言う。2ヶ月後の7月12日。2歳6ヶ月になったA子は、再び母と父とともにやって来た。既

に活動に慣れた様子で、10分余りが過ぎた頃には、父と母の間に立って、壁面の紙に勢いよく絵具を塗っていた。A子は筆を上下に動かしながら線を描き、「アメ、アメ」と言い、それからまた少し筆を動かすと手を止め、少しの間じっとした。父と母が後方から何か声をかけたり手を動かす身振りで書き続けるように励ますが、A子は振り返って笑い、今度は「カタツムリ、カク」と言ってその場にしゃがみ込み、小さい円錯画を描いた。そしてA子が「ママモ」と言って求めると、母は「ママも?」と言って少し上の方に手を伸ばし、ぐるぐるとカタツムリの殻らしき図を描いてみせた。A子は立ち上がり、母の描いた図の上を同じようにぐるぐるとなぞった。そしてその上の余白部分に作業を移すと、今度はさらに筆を走らせて、再び絵具を塗り続けた。

その約半年後の1月24日。3歳1ヶ月になったA子は、再び母と父の間に座って、紙の余白を埋めていくように絵具を塗り続けたり、手のひらに絵具を塗ってスタンプをして遊んでいた。この日は晴れていたが気温が低く、A子は少し鼻水をたらしながら、しかし夢中になって絵具を塗る作業を続けている。そして活動が中盤にさしかかった頃、A子は既に青と赤の絵具で塗りつぶした壁面の紙の上から、重ねて黄色い絵具を塗り始めた。そ

して傍らの母に向かって「パパノ」と言いかけ、その後で「コレハ、パパノカイシャ」とはっきり言い直した。母は「パパの会社なの?」と応えながら、近くにあったタオルを取ってA子の鼻水を拭いてやる。さらにA子は、塗りつぶした紙面の上から大きくジグザグの線を描いて、今度はつぶやくように、また母に何か言った。それに対し母が「階段かあ」と応じ、「この辺りにも描いたら」と紙の上の方を指さしてみせると、A子はさらに大きく円錯画を描いたり、再びジグザグの線を描いた。それから「パパはどこにいるの」と母に尋ねられると、塗りつぶした中央の辺りを筆で指し示し、「ココ!」と答えて、その周辺に小さい円を重ねて描いた。

(2) 描きながら伝えたいこと

初めて絵具遊びをした5月10日に、A子の母がアンケートに記した記述によると、その日のA子の様子は次のように読み取られたという。

「どうやって遊ぶかを考えているのか、真剣な表情で、筆を一箇所に往復させていた。」ここでA子の母は、A子が筆を動かしながら何かを考えているであろうことを想像している。何も考えていないかもしれないが何かを

考えているかもしれない、と母が推し量る中で、たしかにA子は、絵具の色や質感、筆を操作する感触を確かめるように色を塗り続け、その中で「カエル」「カタツムリ」「パパノカイシャ」などの表象を自ら思い浮かべて口にするようになった。

また、指で絵具を塗る母と父の様子を見て「Aチャンモ」と主張したA子であるが、同じように指に絵具をつけて紙に写してから「ママ」と声を上げたことには、おそらく「ママとパパと同じことができた」という喜びと「絵具を指で塗ることを自分も体験できた」という思いが込められていたであろう。複数の筆を専有するなど自己を強く押し出している最中のA子にとって、それは実際に自分の手でやってみること、そしてやってみた後で母に伝えることこそが重要な出来事だったはずである。また、緑色の絵具を塗りながら「カエル」と名付けたA子が、その2ヶ月後には「カタツムリ」を自ら「カク」と言い、「私は描く」のだと高らかに宣言したことは、自分が「描く主体」であることの明確な主張であったらう。

A子の言わんとすることを察し汲み取って応えるのは主にA子の母の役割のようであり、そのためか父母の二人がいる場面では、A子は度々母に向けて自分が行動する意志を

伝えていた。そして一方の父とは、少し質の異なる応答を展開している。

11月15日。2歳11ヶ月だったA子と父は、二人で活動に参加していた。二人はしばらく床面の紙を使って座ったまま絵具を塗っていたが、活動時間が半分を過ぎた頃、少し離れた壁面の紙の前に移動し、場所と姿勢を変えて遊び始めた。その際、父の膝の上に座ったA子が文字を発音しそれを受けて父が文字を描く、という遊びが展開された(図6)。次々と文字を口にするA子の微妙な発音に、父は時おり手を止めて聞き返しながら、そのまま5分ほどA子を抱いたまま、A子の求めに応じて文字を描き続けた。A子は身を乗り出して父の筆先を見つめており、二人にとって、紙に描かれた文字は「互いが応答するための

記号」のようであった。

このときの父は、とくにA子に文字を覚えさせたかった訳ではないだろう。父は全ての活動終了後の振り返りのアンケートで、この活動への参加を通して「子どもと関わる時間を意識して取ることができた」と書き残しており、日頃、A子と関わる時間が制約されていることを窺わせた。母よりもA子と遊ぶ機会が少ない父にとって、A子と二人で遊びにやってくる機会は少なからず非日常的で、貴重なものだったはずである。そしてだからこそ、絵具で描かれた文字が応答の媒体としての機能を発揮し、父とA子とのあいだの丁寧なやり取りを支えることになったのではないだろうか。



図6

4 描かれた物語が子どもにもたらすもの

(1) 応答における語りのプロセス

——H子と母と父のエピソード

7月12日、2歳5ヶ月のH子は、2回目の活動の参加であった。H子は1回目の活動から既に絵具遊びへの抵抗を示さず、母とともに時間をかけて大判用紙に絵具を塗ったり、

壁面の紙の上を絵具が垂れていく様子を眺めてはそれを筆先で止めるなど、楽しそうな様で遊んでいた。そしてこの日、改めて父母とともにやって来たH子は、筆を持った腕を上下に振って床面の紙に絵具を飛ばしたり、壁面の紙に立って大きな円や線を描いたり、絵具を垂らしたりして再び遊びを展開した。

20分近くが経過した頃、父母とH子は、3人で紙の前にしゃがみ込み、絵具の吹き流しを始めた。まず母が絵具を垂らし、それを吹いて流してみせる。H子は驚いたように口を開けて母の顔を見た後、同じように吹き流そうとやってみるが、息が届かない様子である。それからそれを見ていた父も乗り出し、3人

で揃って絵具を吹き始める。H子は母と父のあいだで、大きな口を開けては息を吸い込み、全身に力を入れながら、何度も絵具を吹き流すことを試みた(図7)。そして、母と父が画面に顔を近づけて絵具を吹き飛ばすことに成功すると、声を上げて笑った。

その翌々回の活動日の11月15日。2歳9ヶ月のH子は、円を描いてその中にゆっくりと線を描き込んでいた。円の脇に棒状の物を描いたり、円の周辺に線や点を描いたりしている。何か特定のものを描こうとしているようであり、傍らでその様子を見守っていた父母が、時おり筆を止めるH子に代わるように、



図7

何かの図を描いてみせている。その中で、父が描いた二段重ねの大きなケーキの絵があった。しばらく別の場所で作業をしていたH子であるが、思い出したように立ち上がり、母の手を引いてそのケーキの絵の前に移動すると、ケーキの頭上に棒を描き始めた。ロウソクのようにである。それを見ていた母がロウソクの先に息を吹きかけて「火を消すふり」をすると、すかさずH子も一緒に同じ動作をした。

H子は、しばらく同じ紙に向かっていたが、紙の余白が少なくなったためか新しい紙の前に移り、そこに赤い絵具で大きく線を描き始



図8

めた。そして大きな円とその中に点を描き、いくつものイチゴの絵を描いた(図8)。このとき、H子の傍らで絵具のカップを持ってそれを見ていた母が、片手を広げてイチゴの絵の前で握り、自分の口に放り込んで食べるふりをした。そしてもう一度、別のイチゴの絵の前で手を握ると、今度はH子の口に放り込むふりをした。するとH子も、ぱくりと口を開けて食べるふりをする。さらに向こう側にいた父が、同じように食べるふりをしてみると、H子は自分の左右にいる父母とそれぞれ顔を見合わせて笑った。

(2) 描くことで語られるもの

7月12日に父母とともに絵具の吹き流しをしていたH子は、二人のあいだで力いっぱい息を吹きながら、自分の身体を中心とする絵具遊びを行っていた。これに対し11月15日には、「火のついたロウソクがあるつもり」という想像のもとに、母と一緒にその火を吹き消すふりをしている。父が描いた二段重ねのケーキの絵を間に挟みながらその出来事を空想し、思い描いた風景の中に自ら入り込んでいったのである。

一方、その後に大きなイチゴを描いた際には、H子は自ら思い起こしたイメージを絵としてはっきり再現している。そしてH子のイメージを汲み取った母がイチゴを食べるふりをしてみせると、H子もまたその想像上の出来事の中に入り、自分もイチゴを食べるふりをした。その後で母と父の顔を見て楽しそうに笑う様子には、自らイメージを伝えることをきっかけにしてその遊びが展開したことへの誇らしさも窺われる。

さらにこの日、活動終了前のアンケートを記入する時間の中で、H子はボールペンで一枚の絵を描いていた(図9)。A4用紙にくつつもの円を描いて構成された複数の顔の絵であるが、後にA子から説明を聞き、母が

書き込んだ見出しによると、中央左が「パパの顔」右が「ママの顔」、左上が「ばあばの顔」、そして中央にある小さい図がH子の顔であるという。さらに右端には、氏名の代わりの小さな円が並べられて描かれていた。

H子が顔の絵を描く姿は9月6日にも既に確認されており、その時H子は、父が「アンパンマン」の顔を描くのを見て同じような手順で円を描き、その中に顔のパーツとして小さい円を描こうとしているようであった。これは、「顔を描く」という点では類似の活動であるが、しかし2ヶ月後にH子が描いた家族の絵は、そのときの「アンパンマンの絵」とは意味合いが異なっている。家族の絵においてH子は、その中に自分自身を含めて表現している。H子は日常的な出来事を対象化し、さらにその中心にいる自分を対象化したのである。そして「家族のいる風

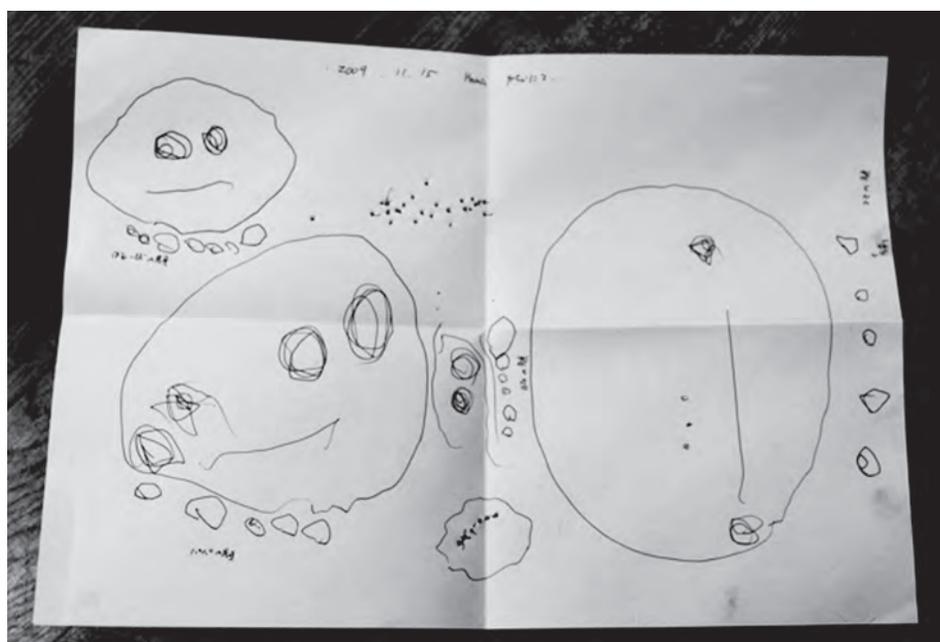


図9

景」の主人公でありながら、風景それ自体を把握する立場に身を置いて、全体の視覚的なイメージを創り上げたのであるiv。

5 物語を通して子どもがいだく「わたし」——満たされた自己イメージへ

人間の精神活動は、幼児期の初期において、わき上がる感情を他者に向けて伝えたり、経験したり見聞きした事象を組み合わせて自分の「物語」を表すことから始まっている。

はじめの問題意識として、人間の自己が幼いときから周囲の人や事象との相互作用によって形成されていくことを述べたが、その過程における描画の役割とは、子どもの語る物語を視覚的なイメージに還元し、他者と共有可能にすることである。絵具で描かれたものを介して、親子のあいだで応答が展開する。そしてその中で子どもたちが口にする人や生き物の名前は、いずれも子どもたちそれぞれが日ごろから親しみを感じている対象であろう。おそらくその対象には、家族のあいだで営まれる応答を通じた出会いがあったはずである。テレビや絵本を通して見聞きしたのかもしれないし、実際に触れる機会があったのかもしれない。子どもがその言葉を口にする度に母や父の顔を見上げる姿は、家庭において為されたであろう日常のやり取りを私たちに想像させる。

また、子どもたちが親しみある対象を描く行動には、応答の中心にある自分自身の姿を、

その絵の中に映し込んでいる側面もあるだろう。そしてだからこそ子どもたちは、描いたものを親に共有してもらおうことを積極的に求めていたのではないだろうか。

とくに家族の絵を描いた日子の場合には、絵の中に現われた自分の姿はそのまま「自己のイメージ」であったことが推察される。H子が描いた家族の絵は、親しい人々のいる風景の俯瞰図であり、同時に、「家族に囲まれている（わたし）」の現れであった。そしてこの絵を通して、おそらくH子はそのような関係性の中に自分自身があることを視覚的なイメージとして確認することができているであろうし、また、そのイメージを再び自分のみている風景の印象へと戻すこともできるであろう^v。

子どもが感じ考える主体であることは、自分自身の身に起きた出来事を対象化し、自らの物語として語ることである。そしてそれは、出来事の中心にある自分を身近な他者に見守られていればこそ、応答の中で自信を持って表わされるものである。

身体を働かせ、感情を揺さぶられる応答の中で、子どもは自分自身の内に「感じ考える

主体としての「わたし」のイメージを抱く。そしてその過程で描かれたものは、我が身に起きた出来事や自分自身を対象化するための媒体として、新しいイメージに姿を変えて子ども自身に記憶される。このプロセスが親しい人々とのあいだで温かく共有されることは、子どもが自律してからも尚、周囲の人々との内面的な関わり合いを愛おしむことにつながっていくだろう。

人が様々な困難を乗り越えて成長することができるのは、自分自身の力によってこの世界を生きられるという自己への信頼と、その裏付けとなる自己のイメージを内面に抱いているからである。だからこそ身近な人々と関わり合いながら育つ過程で、「感じていることをわかってもらって嬉しい」という素朴な感情の通じ合いが重ねられていくことは、いつか危機に直面する「わたし」を支え得る満たされた記憶にもなるだろう。自分の身体を中心とする出来事を思い起こし、一人の人間としての思いを抱いて伝え合うことは、いま、閉塞感と厳しい現実にもまれたこの時代であればこそ、尚いっそう重要な営みになるはずである。

註

- i E. H. エリクソン (右瀬庸理訳) 『アイデンティティ 青年と危機』金沢文庫、1973、pp. 15-16, (Erik H. Erikson, *Identity--Youth and Crisis*, W.W.Norton & Company, Inc., New York, 1968.)
- ii 片岡杏子「スクリブル活動における子どもの原初的表現―情動の共有から、表象を介した対話へ―」『教育美術 2006年9月号』教育美術振興会、2009、pp.45-57.
- iii 片岡杏子「美術表現における〈わたし〉の形成」『日本美術教育研究論集44号』日本美術教育連合、2011、pp.9-17. 本稿で筆者は、J. ブルナー (Jerome Bruner, 1915-)、M. メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961)、E. ドロハ (Henri Wallon, 1879-1962)、C. テイト (Christoph Wulf, 1944-)、齋岡峻 (1943-)、鷺田清一 (1949-) らの論説を参考し、身近な他者との関係性および身体的な経験から子どもの世界と自己形成を論じ、子どもの美術表現が模倣を経て表象の構成に至ること、また素材に触れる作業を契機として「造形的なナラティブ」を生み出すことを説明した。
- iv J. ブルナー『ストーリーの心理学』(岡本夏木・古村啓子・添田久美子訳、ミネルヴァ書房、2007、pp. 119-142. (Jerome Bruner, *Making Stories : Law, Literature, Life*, Harvard University Press, 2002.)) を参考した。
- v 岡本夏木『幼児期子どもは世界をどうつかむか』(岩波書店、2005、pp. 118-157.) を参考にした。